

『電車男』で読み解くインターネット・コミュニケーション

横 家 純 一*

一、はじめに

他者とのコミュニケーションについて、メディア性と匿名性という二つの軸からなる四つの理念型(図1)を考えると、意外にも、「通常の対面」である第一象限のタイプよりも、メディア的、匿名的なコミュニケーションである第二、第四象限のタイプの方が、「親密さ」に近い場合があるという。テレクラやインターネットを例として考えてみると、「見知った人間との生身の接触」である直接的接触よりも、知らない他者との間接的接触の方が、より「裸になれる」というのだ¹⁾。

いったい、どんな事情で、直接性よりも間接性の方が、現実性よりも仮想現実の方が、優位になるのだろうか。生身の接触以上に濃いコミュニケーションの実態とは、いったいどんなものなのか。本稿では、『電車男』(以下、この本からの引用は、『電車、○○頁』と略記する)、および、『封印された電車男』(以下、この本からの引用は、『封印、○○頁』と略記する)を基礎的なテキストとし、現代社会の若者をめぐる、メディア的かつ匿名的コミュニケーション

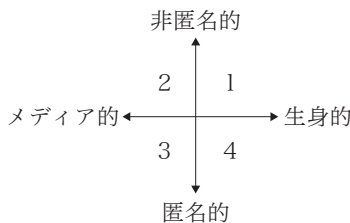


図1 他者とのコミュニケーション
(出所: 宮台真司、2000年、155頁)

ン(図1の第三象限のタイプ)の問題、とりわけ、インターネット(以下、「ネット」とする)がとりもつ「親密さの形成」について考えてみたい。

『電車男』とは、二〇〇四年三月一日から五月一六日にかけて、「2ちゃんねる」という、ネット上の公開掲示板に投稿された文章や絵を、投稿者の一人である「中の人」が、一つの「まとめサイト」に編集し、ネット上で公開していたものを、名前を中野独人と変えて、単行本として出版したものである²⁾。

他方、『封印された電車男』は、『電車男』が編集される過程において、カットされた部分の量と質を問題にし、もともと、ネット上のコミュニケーションとは、「複雑怪奇でドロドロとした人間の欲望」(封印、一一九頁)に満ちたものであり、「今世紀最強の純愛物語」と喧伝される『電車男』はどのような実

態を反映していないと、批判する本である。^③

いずれにせよ、そのストーリー内容は、ある若いオタク系の男性（のちの「電車男」）が、勇気を出して、電車の中で酔っ払いに絡まれた女性（のちの「エルメス」）を助けたこと——そしてそのことを、「電車男」がネット上の2ちゃんねるに投稿し、多くの人がその議論の輪の中に入ってきたこと——がきっかけとなって、二人の関係が恋愛にまで発展するという、ごくありふれたものである。

この本を取り上げる理由は、それが、その後の展開で、漫画化、映画化、演劇化、そしてさらに、テレビドラマ化といった、いわば一大ブームを引き起こしていったこと、だけではない。それが、若者の関心を惹きやすく、人間関係の中でもっとも基本的な内容——恋愛成就——をもっていたことと、さらに、そしてこれがもっとも大きな理由だが、ネット上の掲示板への投稿といった、不特定多数の人（その多くは若者）による「共同性の創出」という、きわめてユニークな形式を兼ね備えていたことにある。それはあたかも、ネット上の一つの「小さな物語」——事実であれ、作り話であれ——が大きなうねりとなって、一つの社会現象を作り出しているかのようにある。^④

二、ケージバンのコミュニケーション

ネット上の電子掲示板（以下、「ケージバン」とする）には、特定の登録メンバーが、特定の話題をめぐって情報交換する、非公開のケージバンもあれば、「2ちゃんねる」のように、不特定多数の人が、さまざまな話題をめぐって、自由に意見を書き込める、公開のケージバンもある。何を書こうと責任を問われない、匿名性がそ

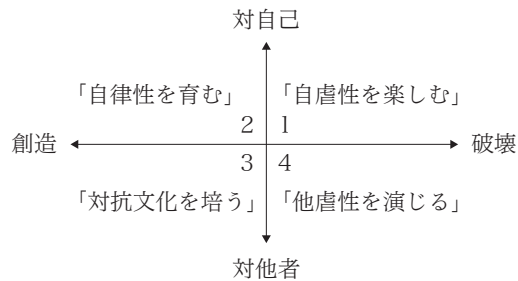


図2 ケージバンのコミュニケーションの4タイプ

のウリである後者のケージバンは、前者に比べて、きわめて「自由な」世界になっている。そのため、中には、「犯罪予告や違法ソフト配布で逮捕された者」までいるという。^⑤

ここではまず、公開ケージバンのコミュニケーションの特徴をつかむために、その方向（自己か他者か）と目的（破壊か創造か）により、四つの理念型（図2）を考えてみる。現実としては、この四つのタイプが入り混じった、多様な形態が存在するということは、言うまでもない。

二ー 自虐性を楽しむタイプ

まず、第一象限の「自虐性を楽しむタイプ」とは、他者の存在、つまり他者とのかなり濃度の高い共同作業を前提としつつ、攻撃性を自己に向けて発散するものである。今回の『電車男』のそもそもの始まりも、独身男の集まりが、自らを「毒男」と称しつつ、他人の恋愛の報告を聞いて、「鬱になることを喜ぶ」というものであったという〔封印、一一五頁〕。

それはおそらく、恋人ができないという自分の弱みを、不特定多数の人にさらけ出すことにより、慰めてもらえたり、思いやりのある励ましをもらえたりするからであろう。もちろん時には、軽蔑さ

れたり、罵倒されたりすることもある。しかし、たとえそのようなマイナスの反応であつても、ネットという、非日常的な時間と空間におけるコミュニケーションであることから、より濃密な状態で、自己反省的な契機をものにできる、ということであろう。たとえば、こんな投稿がある。

正直に言おう。俺は最初電車を舐めてた。
お礼の電話一本掛けるのにうじうじやがって、
よしこは俺達が徹底的に電車をサポートしてやらなきゃなつて感じで。

しかし今では電車は俺の遙か前にいる。ごめんなさい。
俺はいつも人の背中を見てばかりだなあ…。

〔電車、一〇三頁〕

ここでは、「電車男」の恋愛を応援する高みにいたはずの自分が、自らの日常生活にはそのような恋愛関係が欠如し、惨めで情けない、孤立した自分になってしまっていること、に気づかされる内容ではない。しかしだからと言って、そんな自分を放棄しているのではない。他人を蹴落とす「エリート集団」よりもむしろ、他人に対して思いやりのある「ダメ人間」の方を、あえて選択しているとも言えるのだ。⁶⁾

二二 自律性を育むタイプ

これに対し、第二象限の「自律性を育むタイプ」とは、第一象限と同じく自己に向かつてはいるが、それが創造的な性格を帯びていて、他者との共同作業を親密な方向に展開し、そのことで自分自身

も高まっていく可能性をもっているものである。もっとも初歩的なものとしては、たとえば、「電車男」と「エルメス」(「電車男」が思いを寄せている女性)の有名なかけ引きの場面がある。

「ははw、実はカマかけてたんですw」(「w」は、笑の略)
なあ、カマかけるってどういうことだ？ ほんとにわかんないよ…

「行きたいお店があるんですけど、友達が付き合ってくれないんです」↓ 翻訳「次は違うお店に貴方に行きたいわ」って事だと思われ。

〔電車、九一〜九二頁〕

エルメスは、誘ってもらいたいとい、ほのめかしているのに、電車男がそれに気づいていない、という大切なすれ違いのシーンである。ところが、この「カマかけて」という言葉の意味を知らないケージパンの一読者が、訊く。すると、一分後に、「Mr. 名無しさん」が、やさしくその意味を説明する。こんな、いわばイー・ラーニング(e-learning通信教育)的機能が、ケージパンにはある。別の例をあげよう。

「トイメス」に激しく反応してしまう自分がいるわけだが

ガノタかよ…

ガノタってナニデスか

ガノタってのはガンヲタ(ガンダムヲタ)の事。トイメスってのはガンダムに出てくるマイナーな戦闘機の名前

〔電車、二三九頁〕

「下アエ」とか「ガノタ」とかいいう、きわめてマニアックなやり取りについていけない別の参加者が、一六分もたつてから、恐る恐る、訊く。すると、二分後に、答えが返ってくる。ここでは、たんに専門的な知識が披瀝されているだけでなく、それを参加者が共有することにより、マニア的世界を垣間みる喜びに浸っている様子と、無限の好奇心が満たされていく様子が伺える。

ケージバンでは、必要な情報が、多くの専門家から、瞬時に収集できる。しかもこのとき大切なのは、匿名であることから、たとえ自分の無知をさらけ出しても、恥じる必要がないという点である。学校の教室で、手を挙げて質問するときの勇気は、ここではないらしい。

さらにこのタイプで重要なのは、たとえば、電車男の「スレ（数あるケージバンの中のもの、ある特定の話題をめぐって議論が進行する場所、スレッドの略）にあった通りだ」（電車、九一頁）という書き込みから推測できること、つまり、現実の自分の行動を、ネット上の記録と照らし合わせ、確認するという行為である。

これは、上記の「カマをかける」場面に出てくるものだが、女性の言動に対して疎い電車男は、「一緒に店を回る友達がいなくなつた」というエルメスの発言の真意を、その場では把握できなかった。「心の中では電車男に『じゃ、俺と一緒に旨いもの食い行きましょう』って言われるのを期待してたんじゃないのかな？」（電車、八三頁）というケージバンの指摘を受けてはじめて、現実の出来事を再解釈しようとしている。

さらに、次の例は、ケージバンのやり取りを、読者自身が自己点検するものである。エルメスからの贈り物をめぐって、議論が飛び

交う中で、一人、「一気にヒートアップ（アップ）してまいりました」（電車、二七頁）と「実況中継」を楽しむ者が出てくる。これは、自分たちの共同性が確立し、熱気を帯びてきたとき、それを少しさめた目で、外側から監視することで、全体の動きを統制する、いわばモニター機能の現われと言える。しかも、楽しみながら、である。こう考えてくると、ケージバンのコミュニケーションは、その参加者に対し、生身のコミュニケーションを補完するための多様な知識と刺激を供給することで、自己の確立を手助けする機会を与えている、と言えよう。

二一三 対抗文化を培うタイプ

つぎに、第三象限の「対抗文化を培うタイプ」は、第二象限の自律性が、他者、つまり、全体社会に向かって、意識的に開かれたもので、画一的な価値規範により秩序化された現実を、多元的なケージバンのコミュニケーションにより再定義するものである。このタイプが成立するためには、参加者はまず、ケージバンでやり取りされている話題の流れ、つまりその場の「空気」を読んで、「他人が見て面白いこと」を書き込むという、いわば「対内道徳」を確立することが必要である。それには、不特定多数のメンバーだが、自分たちが創造しようとしている共同性に敏感であることが求められる。もしそれができれば、まったく自分個人の思いつきであったとしても、大勢の仲間が見ているため、うまくいけば、称賛や共感が見られる可能性もある。今回の2ちゃんねる参加者による「電車男」の擁立も、そして、「中野独人」による『電車男』の刊行も、そのような背景をもっていたと言える。

ケージバンの「空気」としてまず大切なことは、軽いことであ

る。ネットを自由自在に動くためには、データ量が多く、重いものは敬遠される。ときには、誤解されるかもしれないくらい短く、たとえば「ok（オーケー）」（電車、三五頁）とか「kた（来た）」（電車、三三頁）としてみる。長文を敬遠するのは、なにもコンピュータのサーバへの配慮ばかりではない。人と人との関係を、せてネット上では、複雑にしたいくないという別の配慮がある。

しかし、これと矛盾するようだが、多元的価値を認めるケージバンには、たとえば、台詞（セリフ）（電車、一二一頁）とすべきところを、間違いと知りつつも、あえて「台紙」とする、という暗黙の了解がある。誰かの変換ミスを押かないで、逆利用し、遊んでしまう。それは、やさしさでもあり、柔軟性でもある。

同じく、その女性（エルメス）にお札の電話をせよ、という声に對して、「今すぐ電話すんの？え d r i f t g y ふじこー p @」（電車、一五頁）と、やや驚きを見せつつ、自分の入力ミスを訂正しないで、あえてそのまま投稿する、という甘ったれた態度、もある。これらは、「正しい」表現よりも、「ユニークな」表現を尊重し、完全性よりも不完全性を容認したいという、正しさⅡ秩序のみを一元的に重んずる現代社会へに対する、一つの対抗文化の現われと言えよう。

序列化した現実を再定義するためには、ケージバンは自ら、平等性をその内部構造として確立していなければならぬ。『電車男』のやり取りでは、「コテハン」と呼ばれる、固定ハンドルネーム（いわば、ペンネームで、誰か別の人が騙る場合もあるが、これによりたいてい、投稿者の特定ができる）をもつ「電車男」と「中の人」（『電車男』の著者）以外、ほとんどが「名無し」的存在であり、あるところの発言と別のところの発言が、同じ人によって系統

的に行われたのか、それともまったく別の人の発言なのかを確認する手立てはない。どこで誰が発言したかということについての、文脈的重み付けがない、ということだ。

たとえば、あるスレッドの六八〇番目で、「エルメス」に電話する勇氣のない「電車男」に對して、「お札電話しろ！（しろ）」（電車、一七頁）と強くアドバイスした参加者が、一時間五三分後の、次のスレッドの四八番目で、「前レ680」というハンドルネームを使い、同一人物であることを証明したのち、すぐ、「次から名無しに戻ります（バシ）」（電車、二三頁）としているのだ。このことからわかるのは、「名無し」の状態をキープすることにより、文脈上の発言力——一つの社会的な權威——により投稿文の評価が左右されるのを排除しようという、いわば内的メカニズムが働いていると言える。

つまり、コテハンとしての電車男を除けば、多くの参加者がまったく対等の資格で、ひたすら数多くの文章を読み続ける。その中から、理屈があるもの、おもしろいものを選択し、そうでないものを無視し、捨てる。どこの誰が書いたのかは、いっさい問わないし、学歴や職歴も問わない。その読者のうち、ほんの一部の者が投稿者となり、積極的に反応し、ネット上にある種の「空気」を作りだす。

しかしそれは、必ずしも一つではない。多様な選択がありうるし、空気は重層的である。創造的なものもあれば、破壊的なものもある。その中の、一つの「空気」が、たまたま共同性を作るのに成功し、『電車男』を生み出した、と言える。この意味で、「たった六・四％しか収録されていなかった！」（封印、帯）ことを理由に、この本に価値がないとは言えない。なぜなら、たとえ残りの九

三・六%の声を拾ったとしても、さらにその背後には、何も書き込まずに、ただひたすら、おもしろいものを探し続ける多くの読者の、選択作業そのもの——これこそ、ケージバンのコミュニケーションの本質——まで否定しなくてはならなくなるからだ。ここで大切なのは、六・四%の選択のありようから、投稿を一切していない読者全体の選択行為、つまり若者の社会意識までを推測することである。

二一四 他虐性を演じるタイプ

これに対し、もっぱら、他人へのいやがらせ、うざばらし、誹謗中傷を目的とするものが、第四象限の「他虐性を演じるタイプ」である。現実社会の抑圧から発した自らの攻撃性・破壊性を、他者に向けて投げつけ、傷つく相手を想定してみてはじめて、自己主張ができるという、やや屈折したタイプである。たとえば、ケージバンを荒らすために制作される「タナシン」(封印、三六頁)と呼ばれるナンセンスで、やや気味の悪い絵(図3)がある。

掲示板の創造的な「空気」の流れからすれば、これは、あきらかにナンセンスであるが、技術的には、あるいは芸術的には、かなりの繊細さを必要とする。そこにケージバンの中の演出家としての面目があるが、コミュニケーションとしては退廃的で、マイナスの効果しかない。このタイプのみでは、今回の『電車男』は生まれることはなかった、と断言できる。このような攻撃は、社会的な犯罪との絡みで、世間から注目されることが多いが、これがそのまま反社会的な行動と結びつくと考えるのは、短絡的すぎる。現実社会では非難され罰せられるようなことだからこそ、仮想現実であるケージバンで演じてみせている訳だ。たとえマイナスの書き込み群の一つ

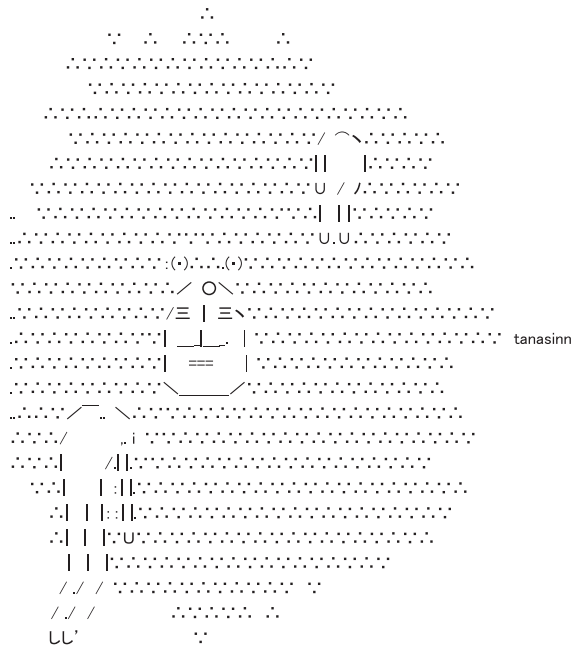


図3 タナシンの一例

[出所: <http://tanashinn.exblog.jp/>]

であったとしても、その中には、この「タナシン」の芸術性のように、どこかでプラスの作用をしていることもありうるし、逆に、プラスの要因がマイナスに働いている場合もありうるのだ。

他虐性の度合いが薄められて、ほとんど言葉遊びになっているものに、「おまいは二度氏ね!!」(電車、二三四頁)とか、「……で逝くべき」(電車、三二頁)がある。表意文字としての「氏」は、「死」を連想させないし、文字として「死」を連想させる「逝く」は、音的には、たんに「行く」である。どちらも発音して始めて、その真の意味がとれる。ということとは、目で読みつつ、つねに音で確認するという、二重のコミュニケーションがここにはある。野球

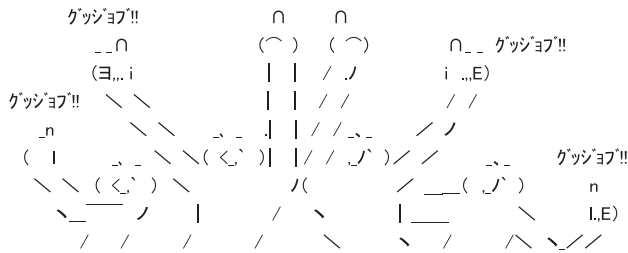


図4 アスキー・アートの一例

〔出所：www.geocities.co.jp/Milkyway-Aquarius/7075/trainman1〕

こうして、四つのタイプのケージバンのコミュニケーションをみてきたが、ここでは、それらすべての土台となつて登場する「アスキー・アート」について考えてみたい。もつとも簡単なものでは、ひざまずいて頭を下げ、謝ったり、落ち込んだりする様子を表す、|—|—○とかorz。これらを文章で表現してしまつては、やや大げさすぎるので、その誇張された部分をカットしつつも、数倍の時間をかけての入力という、やや矛盾した行為で、的確に自らの思いを伝える工夫と言える。別の言い方をすれば、文章表現の直接性という限界を超えるための、間接性の導入でありながら、視覚的には、文章以上の直接性を保持している訳だ。

でたとえると、直球と変化球を同時に投げて、バッターが直球を打ったと思つた瞬間、しつかり変化球でストライクを取つていようなものである。人と人とのコミュニケーションの重層性、つまり奥深さをケージバンの世界は見せつけている、と言える。

三、アスキー・アートの世界

さらに、図4のように、最も基礎的な記号（アスキー記号）を使って、かなり高度なアートと思われる絵がケージバンを彩ることがある。「グッジョブ（よくやった）」という五文字に対して、なんと複雑で手間のかかる表現であろうか。効率的なコミュニケーションとしては落第だが、読者に対するサービス精神としては、たんなる合格以上の成績であろう。

たとえ、あらかじめ、用意されていたものをコピー・ペーストしたものであつても、そこにかけられる情熱と時間と技術は、単なる文字列よりも、はるかに深い印象を読者に与える。単行本としての『電車男』は、そんなネット・ケージバンの表現世界の豊饒性、さらに、現実社会ではあまり味わえない、ひととひとの係わり合いの重層的快感を、2ちゃんねるにはあまりなじみのないわれわれにも十分教えてくれている。

四、メディア化された人間関係

電車男の最大の課題は、女性との交際をいかにうまく進めるかというものであつた。オタクであろうがなかろうが、他者との付き合いは、一筋縄ではいかない。マニュアルなんて役に立たないのが、現実というものである。ところが、『電車男』の中では、たとえば、「エルメスんち行きのチケットとかJTBで売ってくれない訳」（電車、二三五頁）というように、二人の間の階層差に対する電車男の劣等感をきびしく、そして、やさしくいさめている場面がある。必要な時に、必要なアドバイスを、しかも、自分から求めて初めてえられる仕組みになっているところが、ケージバンの最大の長所だ。日常生活の対面式のコミュニケーションでは、そんなタイ

ムリな発言は難しい。ネット上のみんなの「知恵の合作」であることが、その困難性を克服していると言える^⑪。

しかも、うまくいった時はいった時で、自分の喜びを多くの人が喜んでくれるので、喜びの連鎖反応がおこる。現実の出会いにおける感動よりも、ずっと大きい感動が、言い方をかえるとすれば、もっと別の種類の感動がネット・コミュニケーションには生まれていると言える。おそらく、これまでの人類が経験したことのない、新しい恋愛関係の成立だ。ここに、メディア化された人間関係の可能性がある。つまり、メディアによりイメージ化された人間関係が、現実の人間関係を凌駕し、現実が二倍になることで、親密性形成のチャンスが増した、ということである。

こうした契機とあいまって、ネット・コミュニケーションは、われわれの感情表現のありかたについても、変更を要求してくる。次の例をみてみよう。

あれ？なんだろう？目から 水が出てくるよ？ 塩水が 何だろう？何だろう！！！？？？

〔電車、六九頁〕

これは、エルメスとのデートに成功した電車男の報告を待つ、一読者の書き込みである。通常の生活では、文字として表現すること、まして、不特定の他者に伝えることはない微妙な感情が、やすやすと表出されてしまうことである。ケージバンでのこのような感情表現の、いわば増幅作用は、たとえ匿名であったとしても、そこに参加している人同士の親密性を高めてしまう^⑫。

まとめに入ろう。2ちゃんねるというインターネット・コミュニ

ケーションから生まれた『電車男』の解説により、本稿では、以下のことが指摘できる。すなわち、われわれが生活する現実社会は、たしかに一つしかないが、そこには二つの「社会」がある。「社会」という言葉が大きすぎれば、二つの経験の様式がある、と言ってもよい。一つは、直接的で生身のコミュニケーションを基本とする「現実社会」、もう一つは、間接的でメディア的なコミュニケーションを可能とする「劇場社会」。

前者の「現実社会」とは、競争社会の価値規範が支配的で、自己と他者の関係が序列的になりやすく、親密性が形成されにくい社会。他方、後者の「劇場社会」とは、そんな競争原理を回避し、しばしの間、パソコンゲームやコミックの中のキャラクター、および、それにまつわる「物語」を賛美し、それらに「萌え」る自己をひたすら「演出」——とりわけ、ケージバンでは、誰もが投稿者として、「舞台」の上に立ち、主人公になることもできる——することで、他者との親密さを形成する社会^⑬。

結論として言えることは、この現実社会と劇場社会は等価であり、それらの間に優劣はないということだ。人間同士の親密さが形成され、豊かなコミュニケーションが成立するためには、この二つの社会、ないしはこの二つの経験のうち、どちらが欠けてもダメ、ということだ。つながって生きるしかない人間であるがゆえに、なんとか親密さを獲得することで、ともすれば、現実社会で押しつぶされそうになる自分を、劇場社会で取りもどし、たて直すしか術はないのだ。とりわけ、メディア的コミュニケーションを手に入れてしまった若者の世代にとっては、なおさらそうである^⑭。

注

- (1) 宮台真司(みやだい・しんじ)、『自由な新世紀・不自由なあなた』メディアファクトリー、二〇〇〇年、一五二～一五五頁。
- (2) 中野独人(なかの・ひとり)、『電車男』、新潮社、二〇〇四年。この本は、二〇〇五年六月三〇日の段階で、はや第二四刷となっている。なお、「サイト」とは、期限付きでネット上に作られた、文章や映像からなる情報基地のようなもので、ある特定のURL(住所記号のようなもの)を入力すると、それにかんする情報が簡単に入手できる。今回、参照したサイトは、「男達が後ろから撃たれるスレ 衛生兵を呼べ」(www.geocities.co.jp/Milkyway-Aquarius/7075/ アクセス日--2005/08/24)である。
- (3) 安藤健二(あんどう・けんじ)、『封印された「電車男」』、太田出版、二〇〇五年。
- (4) この点で参考になるのは、前田至剛(まえだ・のりたか)の「現実から物語へ／物語から現実へ」という論文である。ここでは、同じ2ちゃんねるメディアの呼びかけ(作り話)で、予定の行事(事実)が書き換えられてしまった「湘南ゴミ拾いOFF」という例が紹介されている。阿部潔(あべ・きよし)・難波功士(なんば・こうじ)編、『メディア文化を読み解く技法——カルチュラル・スタディーズ・ジャパン——』、世界思想社、二〇〇四年、一五九～一六二頁。
- (5) 『電車男』の可能性を示すものとして、本文で取り上げるもの以外には、内容においても形式においても、『電車男』の二番煎じとなっている『痴漢男』(板野住人(いたの・すみと)、双葉社、二〇〇五年)、および、『電車男』の中年向き解説書と言える『電車男 純愛マニユアル徹底解析』(「電車男」を考える友の会、二〇〇五年、(株)コアラブックス)などがある。
- (6) 宝島編集部編、『ありがとう! 電車男——50万人が涙した純愛——』、宝島社、二〇〇五年、六一頁。
- (7) このような自虐性を、オタク文化に精通している堀田純司(ほった・じゅんじ)は、「エリート意識持つて構成される集団よりも、ダメ人間という自虐を楽しみながら形づくるグループのほうが、よほどすがすがしくて良い」と擁護している。『萌え萌えジャパン』、講談社、二〇〇五年、一二九頁。
- (8) みんなの注目を集め、いわばターゲットとなるコテハン^①は、うまく立ち回ることができれば、ネット上で「神」的存在になることもあるという。ちなみに、「神」という漢字はわざわざ二つに分けて、「神」(電車、一二頁)と表記されることがある。神のもつ絶対性を示しつつ、ここまで複雑にすることで、ネットの中にいるメンバーの結束を高める効果があると言えよう。鈴木淳史(すずき・あつふみ)、『美しい日本の掲示板——インターネット掲示板の文化論——』、二〇〇三年、七九頁。
- (9) <http://fanasin.exblog.jp/> アクセス日--2005-09-06。
- (10) たとえば、死という漢字は、かつては自主規制の対象となっていたようだ。鈴木淳史によると、『死ね』を『氏ね』と書くのは、2ちゃんねるの以前に全盛を誇ったあめぞうシステムの性格によるものだ。あめぞうではNGワードという書きちゃいけない言葉があるという。鈴木淳史前掲書、一〇二頁。
- (11) www.geocities.co.jp/Milkyway-Aquarius/7075/trainman1.html アクセス日--2005-09-06。
- (12) 基本ソフト「トロン」の開発者である坂村健(さかむら・けん)は、2ちゃんねるを、フロー型の「知の創造システム」と評価している。「知」の創造にシステム革命^②、日経新聞、二〇〇五年八月二六日。
- (13) 感情表出メディアとしては、できるだけ推敲しないで、おもいつくままに、おしゃべり感覚でお互いのコミュニケーションを楽しむチャットがあり、ケージパンと、このチャットとの中間あたりに、

ウェブログ、またはブログと言われるネット・コミュニケーションが登場してきている。ケージバンが、「知の創造」に向かうとすれば、チャットやブログは、「情の交歓」に向かうのだろうか。渋井哲也（しづい・てつや）、『チャット依存症候群』、教育史料出版会、二〇〇三年、および、山下清美（やました・きよみ）ほか、『ウェブログの心理学』、N T T出版、二〇〇五年などが参考になる。

(13) 「物語」という用語法については、厳密には同じではないが、ジャン・フランソワ・リオタールの『ポスト・モダンの条件』（水声社、一九八六年）、大塚英志（おおつか・えいじ）の『定本物語消費論』（角川書店、二〇〇一年）、および、『物語消滅論——キャラクター化する「私」、イデオロギー化する「物語」——』（角川書店、二〇〇四年）、さらに、東浩紀（あずま・ひろき）の『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会——』（角川書店、二〇〇四年）などが参考になる。とりわけ、『物語消滅論』では、「イデオロギー化する物語」という視点が提出されていて、本稿との違いを見せている。

(14) 本田透（ほんだ・とおる）は、一部、『電車男』の商業主義を批判しているが、オタク文化の生命力、つまり実際に死んでしまいそうな人間を生かしつづける力を力説している点では、本稿の主張と重なっている。『電波男』二〇〇五年、(株)三才ブックス。

また同じ文脈で、精神科医の香山リカは、テレビゲームのもつ癒し効果について、「自分が受け入れられている」とことと、「新しい世界への強い参加の感覚」という二点を指摘している。『テレビゲームと癒し』一九九六年、岩波書店、一九二頁。

* 文化情報学部 文科情報学科